

「ツェルトのカメラ」(その1)

— 初期の歴史と乾板カメラ —

会員番号0790 小林 昭夫

5月の研究会でドイツの中堅カメラメーカー、ツェルトの全般について話をさせて頂いたが、林田編集長から今回も含めて6回連載の許可がでたので、今回は副題の内容について紹介したい。またツェルトの社名はツェルト・カメラヴェルク(1929年以後)というのが正しいが、通常言われているツェルトという省略語を本稿でも使うこととする。

最初にツェルトの概要を簡単に紹介しておきたい。ツェルトは1902年～1982年までドレスデンでカメラの製造を行った会社で、主要製品はフォールディング型乾板カメラ、フォールディング型ロールフィルムカメラ、35mmレンズシャッターカメラで、レフレックスカメラは無い。戦後は東側となったが1972年までは独立会社として存続し、それ以後国営企業の傘下に入った。

表1は調べることのできたカメラ各社の従業員数である。ツェルトは1935(昭和10)年の従業員が135人と分っているので、他社のデータもそれに近いものを集めた。これを見るとツァイス・イコンがいかに巨大な会社であったかがわかる。ツァイス・イコンは第2次世界大戦が始まる1939年には、軍需製品が急激に増えて9000名に達しており、他社も大きく増えている。従って他社の1938年頃の従業員数は、1935年にはこれより少ないと考えるべきであろう。年代は一致しないが、バルダはツェルトの4倍、エキサクタで知られるイハゲーは3倍、ヴェルタは1.5倍の規模である。またプラクティフレックスや後のプラクティカで知られるK.W.や、一眼レフのレフレックス・コ

レレで知られるコッホマンよりも大きい会社である。また同じ年の小西六は1080名と人数で見ると、かなり大きな会社であった。

ツェルトの歴史について書いた資料は、R.フンメル他の著書「東ドイツカメラの全貌」(日本語増補版1998年)以外には見つからないので、以下ツェルトの歴史部分はこの記述をもとにした。

ツェルトは1902年にドレスデンでアルフレッド・リパートとカール・ペッペルにより創業され、4名の従業員で木製カメラとその用品の製造を始めた。日本では明治35年にあたり日露戦争の起きる2年前である。ドイツはビスマルクなどの努力によりドイツ帝国ができた後、ヴィルヘルム二世の時代に入っており、さらに経済や外交に大躍進を遂げつつあった。ツェルトの創業は中堅企業の中では早く、この後バルダが1908年、イハゲーが1912年、ヴェルタが1914年、K.W.が1919年と続いている。

会社は順調に伸びて、1904年に会社名はペッペル&リパートとなり従業員も20名に増えた。その翌年の1905年、事業拡大のため手狭になったドレスデン市街の工場を郊外に移し、会社名も写真機製造アルフレッド・リパート(Fabrik Photographischer Apparate Alfred Lippert)とした。それまで製造していたカメラには名前がなかったが、この年にツェルト名が付く最初の乾板カメラ、ツェルトNo.0(図1)を発売した。このカメラは同じ頃発売されたビュンシェやヒュティッヒのものとは比べると、高級機とは言えないレベルに見える。

1906年、会社名をファブリーク・ツェルト(通称)(正式名はCerto Fabrik Photographischer Apparate und Bedarfsartikel G.m.b.H)とし、初めて会社名にもツェルトがついた。この年は創業から僅か4年目であったが、注目すべき有名なダーメンカメラ(図2)を発売した。

これは畳むと女性用のハンドバックに見える、開くとレンズを前に引き出すベースボード型乾板カメラになるというもので、1906年に6.5x9cm判、1908年に9x12cm判が発売された。外側には鱧革を張り、その上に銀の飾り金具を付けて、ハンドバッグらしい肩掛け用のチェーンもついている。

表1 各社の従業員数

会社名	従業員数	年
ツァイス・イコン	6,300名	1935
バルダ	570名	1938
イハゲー	436名	1938
ヴェルタ	220名	1935
ツェルト	135名	1935
K.W.	105名	1938
バイエル	100名	1937
コッホマン	60名	1935
アルティツサ	60名	1937
小西六	1,080名	1935



図1 ツェルト No.0

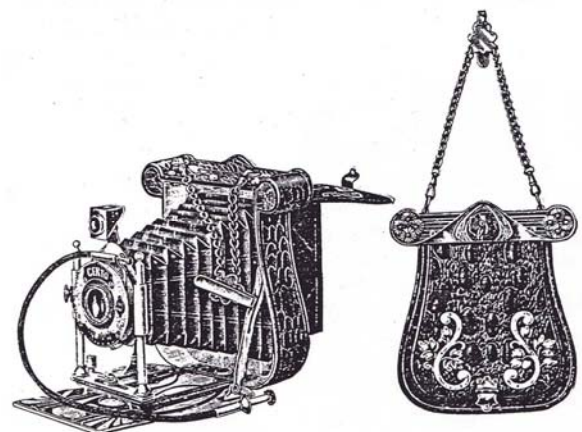
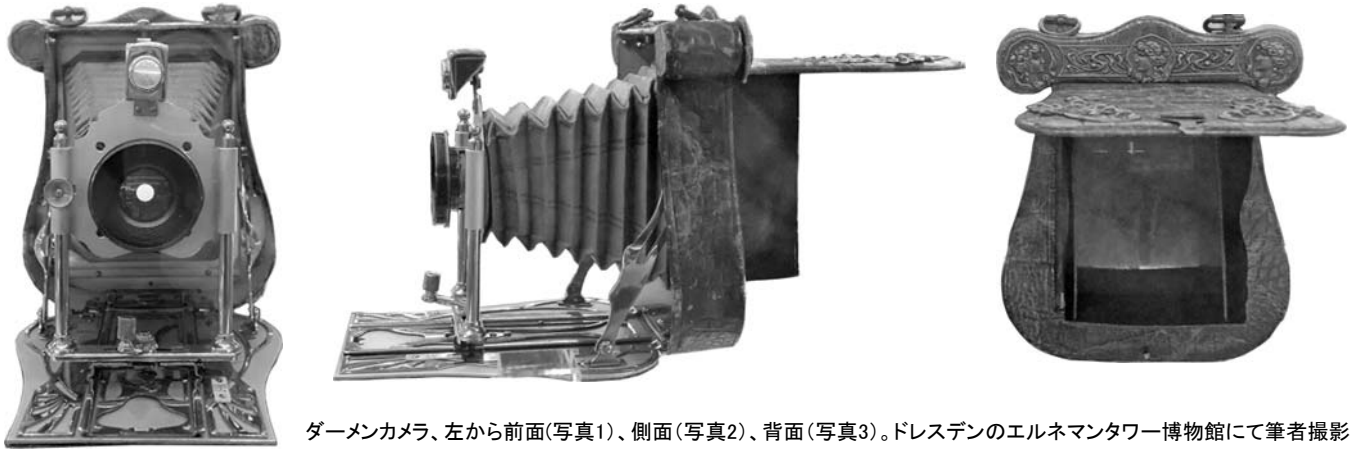


図2 ダーメンカメラ



ダーメンカメラ、左から前面(写真1)、側面(写真2)、背面(写真3)。ドレスデンのエルネマンタワー博物館にて筆者撮影

写真1、2、3はエルネマン・タワーの博物館にある9×12cm判である。カメラは一段伸ばしだが、蛇腹は明るい薄緑色の革が使われており、白いレンズボードや飾り金具が映えて新品時はさぞ綺麗なカメラだったろうと想像できる。裏側にあるピントガラスのフード部分は、畳んだ時カメラの外形と同じ形をした大きなカバーに覆われてカメラだと分からないようになっている。カメラの数は少なくオークションに出てくると大変な高値になる珍品であるが、発売当時は6.5×9cm判で、前述のツェルトNo.0が54マルクなのに対し70マルクと1.3倍程度の価格でしかなかった。カメラは品質の良さが窺われ、社長のリパートの意気込みが感じられる。

その後ツェルトは乾板カメラを主体に輸出が増えるなど事業を拡大し、1910(明治43)年にはウイーンとミラノに販売総代理店をおいた。第一次世界大戦中の1917年に社主は企業家のパウル・チメマンになった。

戦後の1919年には親戚のフリッツ・フォン・デア・ゲナ(後の社長)が入社して、1922(大正11)年には販売部門としてドレスデンに「写

真間屋フリッツ・フォン・デア・ゲナ」を開設した。これによりツェルトは製販一体の会社になった。

この頃から1930年代にかけてツェルトは乾板カメラを木製から金属製のボディに変更していき多くの機種を発売した。乾板カメラには次のようなものがある。

ツェルトロープ(Certolob)、ツェルトルフ(Certoruf)、ツェルトルーム(Certoruhm)、ツェルトクンスト(Certokunst)、ツェルトプラート(Certoplat)、ツェルトレックス(Certorex)、ツェルトトロップ(Certotrop)、ツェルトスポーツ(Certosport)。

このうちツェルトルームは佐野守男さんが、ツェルトプラートは高島鎮雄さんが本年1月の研究会に持参されており、会報97号に説明があるのでそれを参照頂きたい。ここではツェルトロープ、ツェルトトロップ、ツェルトスポーツの3機種について紹介する。なおSportのドイツ語読みはシュポルトであるが英語読みはスポーツが一般化しているのでここでもスポーツを使うことにする。

写真4は1926年発売のツェルトロープXIである。木製ボディで一段伸ばししの6.5×9cm判だが、非常に小型にできており、ボディ部分のサイズは80×115mmしかない。ファインダーはブリリアントタイプのみ、レンズシフトは上下のみできる。本機には、たすきにツェルト特有の折り畳みやすい中折れ型、レンズにローデンシュトックの4枚玉オイリナー105mm/F4.5、シャッターに旧コンパー、距離調節に

一段伸ばしとしては充分なラディアルレバー(写真5)が付くなど、高級機並みの性能がある。実写してみたが非常に良い写真が撮れる。なお廉価型としてレンズシフトができず、距離調節は手送りのツェルトロープXI/0もある。

写真6は1928年頃製造の旧コンパー付きツェルトトロップ6.5×9cm判である。1926年に発売された時に付けられていたボディ側の枠ファインダーは、本機の時代にはワイアフレームファインダー(本機では欠落)に変更されている。また1929年頃にはレンズとシャッターを一体で交換できる機能が追加されているが、本機はまだできない。ツェルトトロップ・シリーズはツェルトの乾板カメラでは最後の方の高級カメラで、上下左右のレンズシフトおよびブラックアンドピニオン型の二段伸ばしができる(写真7)。ストラットは前にも述べたばねの着いた中折れ式で(写真8)スムーズに畳むことができる。本機のレンズはテッサーF4.5だが焦点距離の長い120mmが付けられている。

写真9は1931年発売の新コンパー付き6.5×9cm判ツェルトトロップである。前述のようにこれはレンズとシャッターが一体で交換できる。写真10はレンズのロックを解除する回転レバーの部分である。またこの新コンパー時代におけるピントガラスの装着はスライド式ではなく、ツァイス・イコンのイデアルのように上から押さえてはめ込む方式になっていて、差し込み式のツェルトスポーツとは異なる。写真



写真4 ツェルトロープ

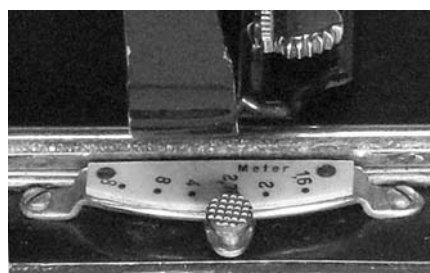
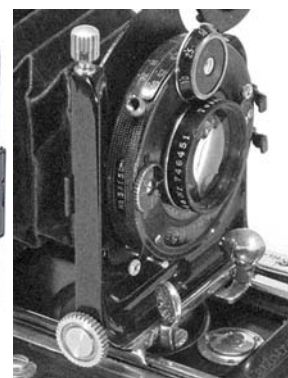


写真5 ツェルトロープのラディアルレバー



写真6 旧コンパー付ツェルトトロップ



←写真7
ツェルトトロップの
レンズシフト部

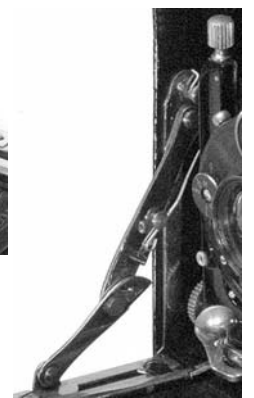


写真8→
中折れストラット

11は両者を比較したものである。またピントガラス部分のフードは、写真12のように写真右上の解除ボタンを押すとばねの力で一瞬に開くとともに、いっぱいの開いた状態を保つことができる。一般には折り畳まれたフードを手で起こすが、折れ癖のついたフードはいっぱい開いた状態を保てなくて見にくいものである。フォクトレンダーのベルクハイルにもばねで開くフードがあるが、フードの片側が柔らかく高さがあるので見にくい。一方ツァイス・イコンのイデアルは手で開くという操作は必要だが、その後内側にある突っ張り板を起こして開いた状態を固定できるので見やすくなっている。本機のレンズはクセナーF4.5だが焦点距離は前記同様120mmである。また本機種には多くのレンズやシャッターの組み合わせがあり、レンズではテッサーf3.5、クセナーF2.9など、シャッターでは後にコンパーラピッド付きが発売されている。

写真13は1929年頃発売された旧コンパー時代の6.5×9cm判ツェルトスポーツである。ツェルトスポーツは機能的にそれまでのツェルトトロップとほとんど変わらないが、この頃ツェルトトロップがレンズ交換できるタイプになったため、できないタイプとして本機種が生まれたのではないと思われる。

このツェルトスポーツはツェルトトロップよりも廉価型になっており、ストラットの中折れではなく(写真14)、左右のレンズシフトは手送りである(写真15)。レンズにはトリオプランF4.5/105mmがついている。また本機種には焦点距離が120mmのものは無いようである。

写真16は1931年頃発売の新コンパー付き6.5×9cm判ツェルトスポーツである。本機を写真9のツェルトトロップと比較すると機能的には、レンズ交換できないこと、ピントガラス部分が着脱式でなく普通の差し込み式である(写真11)ことを除くとほとんど差がない。ストラットも中折れ式になり、左右のレンズシフトもねじ式の摘みを回転する方式(写真17)になっている。

フンメルの本には、フォクトレンダーがツェルトの乾板カメラにおける精密さや品質の良さを評価して、高級機ベルクハイルの金属ボディをツェルトから調達していたと書かれている。確かにこの新コンパー付きツェルトトロップを見ていると、品質は良くフォクトレンダーの評価もうなずけるものがある。

(以下次号へ続く)

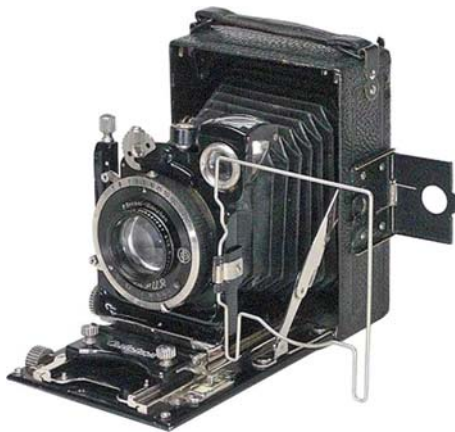


写真9 新コンパー付ツェルトトロップ

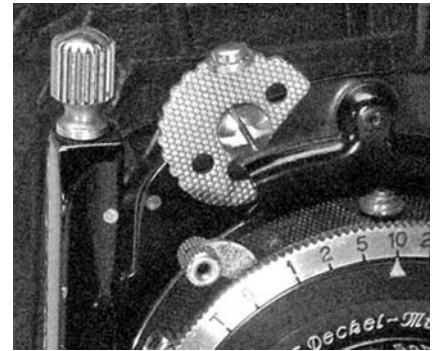


写真9 レンズロックレバー



写真11 ツェルトトロップ(右)とツェルト・スポーツ(左)の背面



写真12 新コンパー付ツェルトトロップのピントガラス部

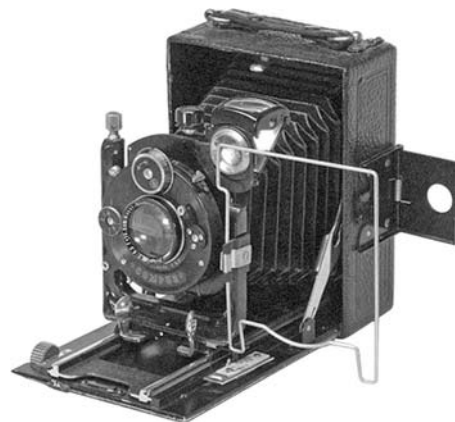


写真13 旧コンパー付ツェルトスポーツ

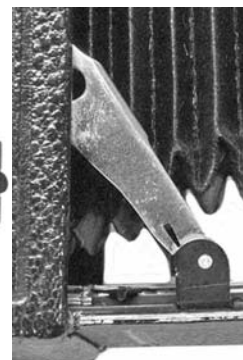


写真14 旧ツェルトスポーツのストラット



写真15 旧ツェルトスポーツのレンズ部

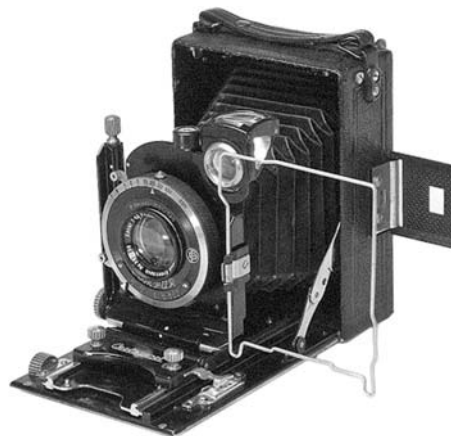


写真16 新コンパー付ツェルトスポーツ



写真17 新コンパー付ツェルトスポーツのレンズシフト部